

個人の自由と社会の立場

大津 隆文

私が子供の頃は日本中が貧しかった。子供が何かを欲しがっても親は与えられなかった。我慢する子が良い子とされ、我慢は美德であった。

高校時代に、ストイシズム(克己主義)、エピキュリアン(享楽派)という言葉を知り、どちらが人間らしい生き方かなどと議論した。私は己の欲求のまま生きるのではなく、理性の力で欲求に打ち克つ方が人間らしいのではないかと思った。

最近是我慢の時代から解放され、個人が欲求の充足を目指すのは当然とされている。それを社会の中でどこまで認めるべきかという論争が、米国では大きくなっている。リベラルという言葉は元来は自由を意味するが、最近は何人かの選択を最大限に認めるべき、という立場を意味するようだ。例えば、大麻を吸いたければ(合法化して)自由に吸えるようにすべきだし、安楽死を望むのであれば幅広く認めるようにすべきだとする。

これにはもちろん反対の立場がある。個人は全く単独で生きているのではなく、家族や地域の人々との共同体(社会)の中で存在している。その共同体のあり方に問題を生ずるような個人の自由は制限されるべきとする。

米国ではリベラル派と共同体派が国論を二分しているかの感がある。さらに、妊娠中絶のような生命にかかわる問題については、宗教の立場からの反発も強いようである。

日本で議論になっている夫婦別姓問題も同じ視点から捉えることが出来る。別姓には子供の姓をどうするかなどの問題はあるが、そういう点を承知の上で二人が選択するのであれば、認めてもよいという主張が強くなっている。これに対して別姓は日本の家族制度、ひいては社会を揺るがしかねないとの反対論も根強い。同様に同性婚や事実婚の問題も、個人の自由と社会の立場のどちらを重視するかで意見が分かれる。

個人の選択の自由とそれが社会に及ぼす影響、両者のバランスをどう図っていくか、大いに論じ合意点を見出してほしい。米国のように分断に向かっていってほしくはない。